

○冒頭で駐車場を広げるために、ソメイヨシノを伐ったと書きました。でも、その近くにあった枝垂れ桜は残っていますから、ご安心を。というか、枝垂れ桜がソメイヨシノの日陰になってしまい、弱って勢いがなくなっていました。ソメイヨシノを活かすのか、枝垂れ桜を活かすのか、その選別を迫られたわけです。○選別といえは以前、湾岸戦争（1991年）の野戦病院に日本から派遣された外科医とご一緒したことがあります。傷ついた兵士が次から次へと運びこまれるなかで、治療する順番をきめるのだそうです。重傷の兵士から治療するかというと、そうではない。生存の確率とケガの程度を勘案して順番をきめる。これをトリアージっていうらしい。調べてみれば、桜の選別（トリアージ）をしたわけです。○しかし、今回の桜は、生き残る確率で選別したわけではなく、どちらが残す価値があるかという桜にとつては理不尽で人間の勝手な基準で選別したわけ。松岩寺にある枝垂れ桜は、長瀬町の法善寺にある巨木の孫木です。亡くなった母がよく言っていました。「この桜は垂れさがっている

編集後記

枝が糸のように細いからきれいなのだ」と。長いこと日陰にいたため、大きくなれなかったけれど、これからは存分に枝を伸ばせ！○さて、作年は大震災の年として忘れられない、忘れてはいけない年でした。知人の僧侶の中には、震災二日後には、福島原発の近くにたどりついてボランティア活動を始めたものもいました。これは日頃の鍛練のたまものです。何もしなかった私は恥ずかしくなります。○弁解にもなりません。大震災の九日前に私が修行した新座市・平林寺の老師（住職）が亡くなられてその密葬を済ませたばかりでした。津送（しんそう＝本葬）が四月末にあり、その総監督を私がやることになり、不慣れた大任で忙殺されてしまいました。○少しばかり足が遠のいていた平林寺へ、足繁く通った一年間でした。今春三月一日には平林寺の新しい老師の晋山式（住職になる儀式）と先住職の一周忌があり四百名の僧侶と三百名の一般の方が参列します。その総監督も任じられていますので、二月後半から三月初旬は不在がちで多忙になりますが、悪しからず。

昨秋、山門横の駐車場をひろげました。数年前にも、通用門などを整理して、六台分確保しました。裏手の会館一階と合わせて十台は駐車できるよつになつたので、街中だからこのくらいでご勘弁を思っていました。なにしろ、これ以上駐車場を広げるとしたら、ずいぶん大きくなった桃の木と楓を伐採しなくてはなりません。その上、ソメイヨシノも伐らなくてはなりません。春に咲く満開の桜花を楽しみにしている方もおられます。樹ばかりか、先住職が作った白塀も壊す必要があるのです、ずうっと迷っていました。でも、「年忌の法事に行くけれど、寺の駐車場は狭いから八木橋の駐車場に置いてくる」なんて言われてしまい、十月中旬から工事に取りかかったわけです。工事を始めると想定はしていましたが、いろいろな雑音が聞こえてきます。曰く「庭が狭くなる」。やがて曰く「桜がかわいそう」。またまた曰く「白壁がもつたない」。など。数年迷ったあげ

新年早々の 余計なおしゃべり

くはじめたことでも、気分が揺らいできます。揺らいでいるのを感じ取ったのか、「変更はごめんだよ」とばかり里見建設が手際よく工事を進めていきます。白壁の裏には、戦災で焼け残った旧山門の瓦が埋められていました。しかし、残しておくとスペースはありません。断捨離です。楓の周囲の植木を移植して土を取り除いて、根元が見えてくると、いい木なんだ！すがたかたちは悪いし、色づきは悪いし、伐つてしまえと、思っていた楓なのに。樹は根元が見えないと、ダメなんです。人間だって、根元がしっかりしていないとダメなんだ。なぜというつまらないお説教をするつもりはないけれど、樹に教えられました。結局、収容台数が二台減ってしまいました。うけれど、楓は残して御影石を敷き詰めたちょっと贅沢な駐車場ができあがりました。駐車場は、望みを言い出すと十台が二十台になり限りがなくなってしまうものです。普段の行事では、どうにか間に合つスペースを確保したので、このくらいでご容赦を。これを、知足といえます。

松岩寺は昭和20年の戦災でほとんどの建物を焼失してしまいました。現在あるものはかろうじて焼け残ったものか、先々代と先代がそろえたものです。その中から、興味深い墨跡（ぼくせき）の一幅を機会をみつけて、紹介していきます。

いっぴく紹介

紹介する墨跡は、伸びやかな中に厳格さが漂う筆づかいもあれば、力強さの中に優しさが漂う筆づかいもあつたりと個性豊かです。そこには、筆をとった禅僧の生きかたそのものが現れています。崩し字になっていて読みづらい字も少なくないのですが、一語一句の意味を理解できなくても見ているだけで一服の清涼剤になりはしないでしょうか。

松岩寺の宗派は禅宗です。禅宗の始祖は達磨（だるま）大師です。正月には床の間に達磨大師の画像をかけます。初心に帰れ！という意味でしょうか。達磨大師は西暦五世紀頃、南インドに生まれます。長じて中国にわたり、禅を広めます。嵩山（すうざん）少林寺で九年間壁に面して坐禅をされたなど、伝説の多い方ですが、実在の人物です。インド生まれですから、碧い眼だったといえます。今回、ご紹介する達磨図をじっくりとみてみると、濃淡の墨一色ですが、眼が碧く見えてきますから不思議です。そんな秀逸な絵と句を書かれたのは古川大航（ふるかわたいこう）老師で、九十歳の時の筆です。



「一華五葉開」
古川大航元妙心寺派管長筆 70×135

大航老師は昭和二十年の終戦時には、中国の北京におられたといえます。北京にある妙心寺別院の責任者をしていたからです。終戦後もしばらく留まり、最後の引き揚げ船で帰国したのは、昭和二十三年八月。その時、胸に抱えていたのは、スライコンで処刑された川島芳子の遺骨であったといえます。あるいは、与謝野晶子の短歌「やは肌にあつき血潮にふれも見でさびしからずや道を説く君」の「君」は、若き古川大航師のことだといふ説もあるから（佐伯裕子著『影たちの棲む国』）色っぽく華やかな禅僧でした、なんて書くといえるでしょう。

老師は明治四年生まれ、昭和四十三年に九十八才で亡くなります。長く妙心寺派の管長をつとめられました。なんてふうに略歴を書くよりも、ガソリンスタンドにある毛筆の「出光」の字を書かれた方といったほうが親しみがわくかもしれません。大航老師は秩父郡吉田町のお生まれです。吉田町というところ、ロケットの龍勢や花祭り、自由民権運動の「秩父事件」の発端の地でもあり、私が知っている吉田町出身の人はみな郷土に絶大かつ独善的な誇りと愛着を持っていました。が、秩父市に合併したというから、時世には逆らえなかったのだと寂しさを感じます。

の下句は「結果自然（じねん）に成る」です。「達磨がインドからもたらした禅は中国で一つの華となり、五枚の花びらが開いた。それは自然のことである」といった意味でしょうか。松岩寺にはこの他に、いくつつかの達磨図があります。今年、その中で一番大きいものを、今回ご紹介しました。今年、その中で一番大きいものを、今回ご紹介させていただきます。